

## 清水 誠

# 原子力発電と意見広告

ある広告審査の情景に思つ

## 一 原子力発電に関する ある超ミニコミ紙

原子力発電についての人々の意見がさまざまに分かることは、事の性質上やむをえないことであろう。そして、それが人類の将来の命運にもかかわる問題であるだけに、できるだけ多くの人による十分な徹底した意見の表明と交換のうちに事が運ばれることが望ましいところである。

今年も新年早々世界の耳目を集めたのは、フランスから返却される高レベル放射性廃棄物の日本への輸送問題であったが、この厄介物の行き先は青森県の下北

半島むつ小川原港であった。

そもそも下北と核燃料基地との関わりを振り返ってみよう。

話は、当時新全総と呼ばれた国の中次全国総合開発計画（一九六九年）に乗せられて、県が描いた陸奥湾・小川原湖大規模工業開発計画に始まる。総面積一萬七五〇〇ヘクタール、石油日量一五〇万バレル、電力一〇〇〇万キロワット、鉄鋼三〇〇〇万トン、投資総額六兆円、一五年後には青森は工業県、小川原は二〇万都市、といった数字に県民もマスコミも踊らされた。第三セクターのむつ小川原開発株式会社がつくられ、強引に農民を説得して三三六三ヘクタールもの土地を買収した。

ところが、この石油基地計画は石油シ

ヨックのためあえなく挫折した。大量の

借金と土地をかかえた第三セクターの後日談として、まず、石油備蓄基地が造られ、そのために築港されたのがむつ小川原港であり、そのための漁業補償の不明朗を突いたのが故米内山義一郎氏のいわゆる米内山訴訟（拙著『時代に挑む法律学』三一五頁、「巨大開発との戦い——米内山訴訟の意義」を参照）であった。

つづいて核燃料サイクル基地、すなわち使用済み核燃料再処理工場、ウラン濃縮工場、低レベル放射性廃棄物貯蔵センターの三点セットと称されるものが浮上したのである。

電力業界は、ここにこんな広大な適地があるといって喜んだと伝えられるが、これらは土地はいうなれば、詐欺同然に

農民から奪われたものである。というのは、本来地元の開発と発展のためと説得されて手放した土地である。その計画が潰れた以上、これらの土地は農民に返却しなければならない土地なのである。それを知らぬ顔をして、核燃料基地に転用し、さらには、核のごみの捨て場とされ、高レベル放射性廃棄物まで運び込まれようとしている。

この春の知事選挙で、これまで核燃料基地化を推進してきた北村知事が敗れ、二月二六日に就任した新しい木村知事によつて一日だけむつ小川原港における陸揚げが延ばされて話題をまた。しかし、肝心の日本全体の原子力発電の廃棄物をどこにどう始末するかについて、推進者のだれ一人成案をもつてないのである。二〇一〇年までに原子力発電を全廃することを決めたスエーデンが、早くも、使用済み核燃料の最終処分のための研究施設を完成させたと伝えられるにしかねらず……（朝日新聞一月一三日夕刊による）。

私も、この問題にはかねてから深い関心をもち、その関心に基づく行動のひとつとして、「さよなら原発 恐山をおそれる会」という名の、あるときやかな運動に共感を覚え、これに、これもまたはなはださきやかな支援をしてき

た。このグループは、「さよなら原発ニュース」という題の超ミニコミ紙を一九八八年二月の第一号から随時発行するとともに、ときおり全国新聞や地方新聞に意見広告を掲載することをその運動の特色としている。その意見広告のための費用を公募するたびに、私もわざかながら志を寄せることにしているのである。

用を公募するたびに、私もわざかながら志を寄せるにしているのである。

## 二 原発反対の意見広告と その審査

ところで、このささやかな運動が今年も企画して、朝日新聞の青森版に「放射能のツケを子供達の世代にまわしたくない！」もう一度立ち止まって考えよう！

核燃料サイクルの危険性」という表題の二分の一紙面の意見広告を掲載しようとした。その内容は主として地質学者生越忠氏とのインテラビュー記事である。その原稿を広告社を通じて朝日新聞に提出したのが一月一二日、それからそれが二月三日に掲載されるまでに、「さよなら原発ニュース」第二四号（二月二二日付け）によれば、つきのような内容に対す

る審査が行われたというのである。「ここには、同紙に記載されている審査場面のいくつかを選んで紹介しよう（以下の記

事は同会代表の楠幸子氏の記憶に基づく記録のそのままの引用である。私は同氏を信頼してそのまま紹介するが、もし事実と違うという申し入れがあれば、それを紹介することにやぶさかではない）。

### 地震のエネルギーの計算を説明しろ

広告代理店Sさん「地震のエネルギーのところについて具体的に計算して説明するようにと広告審査が言っています。」

楠「理科年表の公式に常用対数表の値を代入して求めると書いて、理科年表のコピーもついているんですから、それでいいでしょう。」

広告代理店Sさん「それでは駄目だと言っています。」

楠「それは生越先生のおっしゃったことで、私のような素人がいっているわけではないんですよ。生越先生は地質学者の研究者で博士号をもつていらっしゃる方なんですから、そんなことを間違はずはないから、そのまま載せてくれればいいじゃないですか。」

私がつて生越先生の説明を伺つてなんなく分かった程度で、人に説明するなんて大変ですよ。だいいち常用対数表なんて家にないから。」

広告代理店Sさん「そ」をなんとか

事は同会代表の楠幸子氏の記憶に基づく記録のそのままの引用である。私は同氏を信頼してそのまま紹介するが、もし事実と違うという申し入れがあれば、それを紹介することにやぶさかではない）。

お願いします。」

そんな訳で、勤めがえりに常用対数表の付録のついた数学の参考書をやつとの思いで見付けて買って帰った。対数表付はその売り場にたつた一冊しかなかつた。ところが、理科系の人には

うと笑われてしまふけれど、二十余年も計算したことがないと、忘れてしまって、対数の概念、指数法則を思い出すのに三時間もかかつた。それから常用対数表を使い、広告審査の人にも分かるような式を書くのには、また三時間もかかつた。

楠「生越先生に伺つたら、他の学者も言つてはいるけれど、わざわざ他の学者は書いていないことがあります。べつに論文は生越先生のものだけあればいいでしょ。一人でも学者が書いていればいいのではないですか。」

この部分は最後まで自説か他説かとしつこく聞かれた。「自説でもあり、他説でもある」と答えて他の学者の書いたものがないと納得しないのだ。

最後に東京大学出版会の『日本の活断層』の普及版の解説書に「海の巨大地震が起つこと予想されました。といふのは誰が言つているのか、と審査がいつています。」

楠「それは生越先生が言つていらっしゃるのです。」

広告代理店Sさん「予想されていま

したという以上通説になつてゐるといふことなので、他の学者の書いたものもほしいといつています。」

この質問は生越先生がまだ在宅の内であつたので（清水注：生越氏は旅行をまじかにひかえておられたとのこ

とである）、先生に電話をかけ質問した。

生越先生は、「そういう周期で起こっているのですから、聞けばみんなそういいますよ。でもわざわざ論文に何時頃次の地震がおこるとは書きませんからね。」とおっしゃる。

楠「生越先生に伺つたら、他の学者も言つてはいるけれど、わざわざ他の学者は書いていないことがあります。べつに論文は生越先生のものだけあればいいでしょ。一人でも学者が書いていればいいのではないですか。」

この部分は最後まで自説か他説かとしつこく聞かれた。「自説でもあり、他説でもある」と答えて他の学者の書いたものがないと納得しないのだ。

最後に東京大学出版会の『日本の活断層』の普及版の解説書に「海の巨大地震の発生間隔は数十年から数百年で比較的短く」とかかれた部分があつたのでそれを示すとやつと納得したようだつた。

他県の死者の内訳を示せ

広告代理店Sさん「十勝沖地震の死者が青森四七人、その他五人と書いてあるところで、他県の死者の県別内訳が必要だといつています。」

楠「理科年表にも死者五十二と書いてあるのを資料としてつけてあるし、

他県の内訳がなんで必要なんですか。」

広告代理店Sさん「そうぢ

が、まーはつていうんです。

生越先生の論文に書いてある部分を

送り、さらに図書館にいき、日本電気協会の『わが国の歴史的地震被害一覧表』のコピーを入手してそれをつけタリアーした。

二十七年前の六ヶ所村の敷地付近の  
地震被害の証拠を示せ

広告代理店のSさん「過去に敷地またはその近傍に最大の被害を与えた地震は一九六八年の十勝沖地震であるのに――というところですが、具体的に敷地に影響を与えたという証拠、新聞記事かなんかをつけると言っています。」

楠「二十七年前には六ヶ所村には核燃はおろか石油備蓄基地だってつくら

れていなかつたし、田舎で人口も少なくて新聞記事になんかなつていないと  
思ひますけれど。」

しかたなく当時の朝日新聞の縮刷版を調べた。するどこの地震では、八戸飛行場の管制塔が壊れ、三沢飛行場も使えなくなり、三沢商高が壊れ、むつで農業用水が決壊、青森の青函連絡船の待合室が崩れおち、東北、北海道南部の鉄道網が脱線やレールや鉄橋のひびでズタズタになり、水道、ガスは止

つまり、火災や土砂崩れも起きていた。なんだつたことを知らせる記事が連日の紙面を埋めていた。しかし、東北町や、五戸町、六戸町の被害記事はあるが、六ヶ所村のものはない。交通、通信も途絶え孤立している村落もあると、いう記事もあり、村のものは記事になつていなかつた。これらの記事と震度分布図をつけ、「六ヶ所村も近隣の被害の出た市や町と同じ震度六に近い五の区域に入っている。だから、六ヶ所村だけ揺れなかつたということではない。田舎で死者が出なかつたので、新聞記者が取材にいかなかつたために記事になつていないと考えられる」と説明をつけ、やっと納得してもらつた。

ウラン濃縮工場はまだ出来ていないのではないか

広告代理店Sさん「ウラン濃縮工場はまだ出来ていないので、新聞記者が取材にいかなかつたために記事になつていないと考えられる」と説明をつけ、やっと納得してもらつた。

楠「新聞社に勤めているのに、新聞を全然読んでいないみたいに何も知らないんですね。ちゃんとウラン濃縮工場も低レベル放射性廃棄物貯蔵センターとも稼働しているんです。」

つまり、火災や土砂崩れも起きていたいへ  
んだったことを知らせる記事が連日の  
紙面を埋めていた。しかし、東北町  
や、五戸町、六戸町の被害記事はある  
が、六ヶ所村のものはない。交通、通  
信も途絶え孤立している村落もあると  
いう記事もあり、村のものは記事にな  
っていなかつた。これらの記事と震度  
分布図をつけ、「六ヶ所村も近隣の被  
害の出た市や町と同じ震度六に近い五  
の区域に入っている。だから、六ヶ所  
村だけ揺れなかつたということではな  
い。田舎で死者が出なかつたので、新  
聞記者が取材にいかなかつたために記  
事になつていないと考えられる」と説  
明をつけ、やつと納得してもらつた。  
ウラン濃縮工場はまだ出来てない

のではないか

広告代理店Sさん「ウラン濃縮工場

はまだ出来ていないのではないか。次  
の低レベル放射性廃棄物貯蔵センター  
というのは、高レベルの間違いだろう  
と言っています。」

楠「新聞社に勤めているのに、新聞を全然読んでいないみたいに何も知らないんですね。ちゃんとウラン濃縮工場も低レベル放射性廃棄物貯蔵センターも稼働しているんです。」

料をお願いします。そこで、……やつとのことで、一九九四年六月七日 東京新聞の『青森の原燃施設ルポ』という記事を探した。「この日は濃縮場が二月に起きたトラブル以来三ヵ月ぶりに操業を開始した日」「原発から出される低レベル放射性廃棄物を埋する、いわばごみ処理場が埋設センターだ。屋外の埋設地区に運び込む。重にもコンクリートなどで固められめられていく。現在二万八千本を埋めた。」再処理工場の工事現場には五数本の太いクレーンがひしめき、超大型三二トンダンプが並ぶ」といったところにラインを引き資料とした。

やつとのことで、一九九四年六月七日 東京新聞の『青森の原燃施設ルポ』という記事を探した。「この日は濃縮場が二月に起きたトラブル以来三ヵぶりに操業を開始した日」「原発から出される低レベル放射性廃棄物を埋する、いわばごみ処理場が埋設センターだ。屋外の埋設地区に運び込む。重にもコンクリートなどで固められめられていく。現在二万八千本を埋た。」「再処理工場の工事現場には五数本の太いクレーンがひしめき、超型三二トンダンプが並ぶ」といったところを引き資料とした。

三 広告に期待されるもの

私は、マスコミの広告審査については、日本広告審査機構（JARO）の行つてゐる努力のことなども聞いたこともあり、それなりの敬意も抱き、かつ深い関心を寄せているものであるが、楠さん  
が経験したような、こんな審査が行われ  
ているということには、驚きを通り越し  
て唖然とする思いであつた。他方で、マ  
スコミ界は、たとえば消費者に被害を及  
ぼすような——多重多額債務を結果する

私は、マスコミの広告審査について  
は、日本広告審査機構（JARO）の行

つてゐる努力のことなども聞いたこともあり、それなりの敬意も抱き、かつ深い関心を寄せているものであるが、楠さんが経験したような、こんな審査が行われているということには、驚きを通り越しで睡然とする思いであつた。他方で、マスコミ界は、たとえば消費者に被害を及ぼすような——多重多額債務を結果する

と専門家のコメントが載るが、そのような新聞社の責任において載せる記事においてだって、専門家に膨大な根拠を示す資料を要求して審査をしたりなどしないだろう。……他県の死者の数の内訳を要求するなどは、広告審査を長引かせて、広告を希望期日に載せないためにやつていることのように感じられた。」とのべている。楠さんは最後の部分で「広告代理店Sさん」にはその労に対して謝辞をの

クレサラ業界の広告のような——広告について媒体としての責任を負うことについては、これを否定することに極めて熱心であるよう思われる。少しでも審査をすれば、その広告の問題性については明瞭に認識できるのではないかと思える

場合がまま見受けられるにもかかわらず。それやこれやを考えると、いったいこの種の事柄についてどう考えたらよいのか、戸惑わざるをえない。

この広告とその媒体の責任の問題については、改めて十分な材料が得られたと思われたときには再論したいと思うが、右の事実を踏まえてとりあえず浮かぶ感想

として、市民法の精神においてもっとも重要なことは、相手によって態度を変えないということであることを指摘しておきたいと思う（前掲拙著四頁）。官僚、政治家がそのような、相手によって手の平を返すような態度をとりがちであることはもちろん遺憾のかぎりであるが、民間の言論機関ともあろうものにそのようなことがあっては、社会の木鐸の名が泣こうというものである。

ちなみに、科学技術庁と通産省資源エネルギー庁が青森県六ヶ所村の核燃料サイクル事業に関連して、過去一〇年間に地元の新聞、テレビ、ラジオに支出した「広報予算」は一八億円にのぼると伝え

られている」とも付け加えておこう（朝日新聞、五月二日朝刊）。

#### 四 巨大開発余滴

さて、今回のテーマの舞台となつた、むつ小川原の「開発」なるものについて、余白を借りてぜひ付言をしておきたいたことがある。それには、「さよなら原発ニュース」の第三号（一九八八年四月二六日）に私が寄稿した文章をそのまま再掲することをお許しいただきたい。

『巨大開発』への憤り  
青森の六ヶ所村への思いを抱きながら、先日沖縄の石垣島に行ってきました。そこでは、世界でも珍しいサンゴ礁を潰して、海岸を埋め立て、新空港を造ろうという計画が進められているのです。東京や大阪からジャンボ機が直行便で発着できるようにという話なのですが、狂氣の沙汰とは思いませんか？ 本土と地元の土建業者とその利害につながる人たちが、島の相貌をすっかり変えてしまいかねないほどの工事をやった挙句、もうあとはこれしかないということで熱心にこの話を推進しているのです。「むつ小川原」もそ

うですが、いったい本当の公共工事と、いうものがいまの日本にあるでしょうか？

神奈川県の芦ノ湖から流出する箱根用水または深良用水という暗渠の水道を存じですか？ 三百年以上も前に友野與右衛門や多くの農民たちが造った用水です。「箱根風雲録」という映画がこの事業のことを描いていましたので存じの方もおられるかと思います。あんな昔に山の両側から掘り進んで真中で一致させるという技術をもつてたといふことにも驚かされます

が、私がとくに感じ入るのは、その時以来この用水は一日も休まず大量の水を裾野に流しつづけ、莫大な便益を人々に与えつづけていること、そして、なんの不利益をも人々には与えていないこと、そして、映画も描いていたように友野たちは幕府権力によって消されますから、この事業の担い手たちはなんの利得もしていないというこ

とです。どうです。こういう事業こそその後、「おそれる」は「畏れる」の意味であるということを教えられた。「さよなら原発 恐山を畏れる会」という趣旨なのだとそうである。それなら異論はない。われわれは、もつともと自然をも人間をも畏れる精神をもたなければならぬ。右の文章にのべた余計な老婆心についてここでお詫びをしておきたいと思うのである。

●――訂正  
前号七二頁第一段一三行目からの、「その懐てぶりは、……」で始まる文章の末尾に「……という経緯からも窺われる。」という部分が脱落していましたので、訂正します。  
(しみず・まこと 神奈川大学教授)

つた、人にどう思われるかを、気にします。そうでないと、本当に悪い人に撹乱されるだけです。ただ、真情を人に理解してもらうよう最大の努力をする必要はあると思います。恐山を「おそれ」という言葉が、こわがるという意味に誤解されたのではないかとう気がするのですが、もしもそうだとすると、とても残念なことだと思いますので、一言老婆心まで。